

「読むこと」に残る不安

品川区立大崎中学校教諭

堀江 ぼりえ

佐和子 さわこ

「読むこと」は、今どのように扱われているのか
週四時間から三時間へと国語の授業時数が減少して
一年が過ぎました。この一年間の実感として、私の周囲
から聞こえる声を拾ってみます。

「時間のことが気になって、生徒の反応をゆっくり見
ている余裕がないのよね。」

「文学作品をじっくり味わいたいと思っても、週に三
時間では、学校行事があると間隔が一週間も空いてし
まうことがあって、ちっとも集中できない。」

「指導書の計画では「故郷」が三時間扱いになってい
るけれど、三時間なんて無茶よ。作品の背景もなにも
あったもんじゃない。深く考えてほしい作品なのに。」

せるとともに、読書を生活に役立てて自己を向上させよ
うとする態度を育てる。
となつていきます。

「学年での目標は「内容を的確に理解すること」に重
点があり、一・二・三学年では「活用すること」が求めら
れているようにです。

けれども、読んだことを「効果的に活用する」場面は、
国語に限ったことではありません。他の教科でも、また、
総合的な学習の時間の中でも、そのような場面が想像で
きます。そう考えてみると、国語の学習が、あらゆる学
びの基礎をつくる学習であることに改めて気づかされま
す。国語科の学習で身につけた力がさまざまな学習の
中で生かされるわけです。ともあれ、内容を的確に理解
することが「読むこと」の根幹となり、さらにそれを
活用することを求められていることを意識する必要が
ありそうです。

今まで「読解指導」として行ってきたことはどのよう
なことだったでしょうか。文学的文章であれば、登場人
物の心情を示す部分を抜き出したり、説明的文章であら
ば、文章の構成を表に書いたりといった学習は、「的確
に理解すること」につながっていきます。しかし、その

「説明文を読むときも、内容に触れるだけで精いっぱい。
定期テストの時期は迫ってくるし、文章の構成に
触れたり、ましてや、自分でも書いてみるなどという
学習まで時間を割くことはできないよ。」

「読むこと」は、国語の授業のいちばん中心にあった
はずなのに、(だからこそ?)一時間の時数減のあたり
をいちばん強く受けているような気がします。

この現状の中で、私たちは、もう一度国語の学習の中
の「読むこと」の位置づけを見直してみる必要があるの
ではないでしょうか。「読むこと」を通して生徒たちに
つけたい力は何なのか。現実になくなってしまった国
語の時間の中で、どんなふうにその力をつける工夫をす
ればいいのか。考えてみたいと思います。

「読むこと」とは何が、そこでつけたい力は何か

学習指導要領の中の「読むこと」の目標をみると、
「学年……様々な種類の文章を読み内容を的確に理解す
る能力を高めるとともに、読書に親しみものの見方や
考え方を広げようとする態度を育てる。」

一・二・三年……目的や意図に応じて文章を読み、広い範囲
から情報を集め、効果的に活用する能力を身に付けよ
うとする態度を育てる。
次の段階である「効果的に活用する」というところへの
道筋をどう考えればよいのでしょうか。

安居総子氏は「読む」という行為を広くとらえるとい
つは文章を読み解く力、一つは生活に役立てる読みの力
に整理できると分析しておられます。『伝え合い・学び
合いの時代へ』東洋館出版社(この二つの力をたつた週三
時間の国語の授業の中で、ともに伸ばしていくにはどうし
たらよいか、その方法について考えてみたいと思います。

「読むこと」の発想を変えて

自分の指導を振り返って考えてみると、今までは教材
としての文章をまず読み解くことから学習を始めていま
した。もちろん、読み解くことは「読む」ことの大事な
力ですから、当然なのですが、何のために読み解いてい
るのか、読み解いたことが何に生かされるのかという視
点が欠けていたように思います。

まったく読み解くことができないままでは、それを何
かに生かすことはもちろんできません。けれども、極端
な言い方もしませんが、たとえ「読み解いて理解す
ること」が不十分であったとしても、次のステップの作
業の中で、生徒自身がその不十分に気づいて、もう
一度文章に立ち戻っていくような、そんな学習を考えて

みることはできないでしょうか。

「故郷」の事例で

魯迅の「故郷」は、長年、教科書に載っている教材です。当時の中国の状況、その中に生きる人間の姿、生き方、また、竹内好氏の翻訳による情景や心情の描写の的確さなど、見るべきところの多い作品だと思えます。

この重厚な作品を読み解くだけで終わらず、各目の読みを再構成する形で、読んだことが一つの情報になるような読みを試みました。

第一次 作品を読む。(3時間)

学習の流れを知る。(第二次の学習についても触れる。)

1時 ・魯迅の生涯を知る。

・故郷の描写を読み、感じたことをメモする。

2時 ・感想メモの中からいくつかを印刷して、感想を共有する。

・故郷で出会った人々に焦点を当て、その変化について気づいたことをメモする。

3時 ・メモの中からいくつかを印刷して、その変化の理由について考える。

・故郷を離れる「私」の気持ちを想像する。

ます。また、そこで書いた小さな感想が、「表現を味わう」という形で、小冊子の中に生きるとして、という意図もあります。さらに、友達の読みを通して、自分の読みを確認したり、深めたりすることにもなります。



「読むこと」それでも残る不安・問題点

小冊子を作る作業を通して、生徒たちはもつ一度作品に向き合い、自分の言葉で書くことをします。作品を再構成するために、一人一人の「読むこと」を体験するわ

第二次 「故郷」をめぐる小冊子を作る。(2時間)

小冊子の内容の例として

・作者への手紙

・登場人物の紹介・人物論

・表現を味わう

・作品の構成を読む

・当時の社会状況

・魯迅のその他の作品紹介

・魯迅の生涯・作家論

・その他

第三次 できあがった作品(情報)をクラスの中で

お互いに読み合う。(1時間)

学習の最終の形(この場合は小冊子を作る)が見えていて、そのために「読む」活動をするわけですが、第一次にはあまり時間をかけていません。そのために、「ヤンおばさん」が「私」に「知事様になっても金持ちじゃない?」というところで「私」を「知事である」と思い込むといった、とんでもない読み間違いがあったりします。そういう間違いを防ぐためにも、毎時間の小さな感想を、次の時間に前の時間の振り返りとして活用し

けです。けれども、実際の授業では、ここにほとんど時間をかけられません。結局、授業中に終わらなかった作業は家庭で、ということになってしまいました。本来なら、この時間にこそ、一人一人の読みをじっくり教師が確かめたり、アドバイスをしたりしたいのです。作品の本来もつ魅力も手伝って、ほとんどの生徒が楽しんで作品を作ってきたことが、この時間を学校の授業の時間の中で保障できなかったことは、やはり問題があると思います。

また、どのような最終の形を用意するかによって、何に重点を置いて読むのか、という点も変わってくるでしょう。どんな目標のもとに、どんな「読み」を体験させるのか、考える必要があります。そして、時間数が少なくなつた今、同じような読み方を繰り返す余裕はなさそうです。どの時期に、どんな学習をするか、分析する必要があります。よいに思います。

英語や数学と違って、国語は「この構文を教える」「この公式を教える」といったはっきりした形がありません。国語の学習として、この時期に、このような力をつけるため、このような学習が必要ということを分析していくと、「国語科で困っている」ことが、もっと明確になるのではないのでしょうか。